

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



健全學

慶應丁卯孟冬新銹

健全學

杉田擴玄端譯

上編

致高館藏版

仙哲生性體而

今易失徑

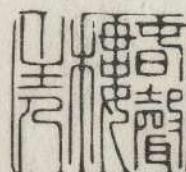
孫子善考

宋義猶

否泰西依卜氏之

語

権心先生著書



凡例

一本書ハ英國の醫官ロベルトセエムス・メンの著す所にて其國文と以て記せり。代荷蘭の醫人、イルテ・ド・ロイ・ン・コフ・ス其邦語小譯。自己に見識をも所載以く其不足を補ひ、又尚了解し易く。一あり。為し註釋を加へる者たり。其鏤版彼紀元千八百五十六年より。實ふ我安政三年丙辰に當れ。一原書ハゲソンドヘイドレールと名くる書なり。蓋一ゲソンドハ無病健全の義。一ルハ學科の義をも。故ニ今之改譯して健全學と題す。

一 原書ハ瑣々たる小冊子にて唯一冊分けて十四篇となリ最後ノ篇中諸處の補説或輯錄せり、然ども今便覽に供する所之れ之れ各條の下に附録にて(補説)の字代冒す、又其註釋の如きハ(註)の字を冠して之を區別す。

一 書中出了所の尺度秤量一と舊く依る而一て近來譯述の諸書より詳悉あるは今別々贅せし、但一書中の度量ハ英國の法度用ひ、英國の尺ハ我曲尺(只少く長きのみ)之を十二分^{スル}者と寸とあり、之を十二分まる者を分とすれ、故より寸と云者ハ我

八分三厘餘小値^ル分も亦準^レ之其荷蘭法度用ひ者
の如をも必ずしも荷蘭の何斤何尺等と記せり、
一通篇諸論極めて簡約ありと雖、方今諸學隆盛となり
多くれど頗る精微の説^ス基紀編成せるといふ我
邦又於てハ在々新聞創見の論多し、故より已^レ拙
陋^シ以顧み^シ之を翻して同臭の士^ス示すのみ看る
人其不文哉咎むる事と勿毛、

文久三癸亥歲五月念又二日

杉田擴玄端 誌

健全學

總目錄

上編

第一篇

天地間萬物の生活論す

第二篇

機性體諸元質の論

第三篇

食物及び消食機の論

第四篇

血液の論

第五篇

血行及び呼吸の論

第六篇

人身體の論

中編

第七篇

筋・神經・腦髓の論

第八篇

分泌及び排泄の論

第九篇

健全及び疾病の論

第十篇

食料の論

下編

第十一篇

飲料の論

第十二篇

大氣浴湯及び運動と論む

第十三篇

氣候身體ふ關係ある試論む

第十四篇

前篇諸條の應用と論を

健全學上編卷之上

杉田擴玄端 譯

第一篇

天地間萬物の生活を論す

汝試シトゾ一個火石ホチキの其廢カド穢カ地上アヒに向カムて地上アヒ在リ有リ者カ、其石幾イクニ日子幾イクニ年所シテの久カニを經スルも同一處シテありと全く原形モトナリ放變ハラフシもとあリくと無シし、○此物路ミ傍ハタよりて馬車カリ碎クダくことなく、又人あリて觸タる

ることあきとせき、尚數週數年乃至數百年も連綿と
して本モト在り一處モト留メテ居リべし。○若此物の上ノ雨
雪降積フリツキア風飄吹ハラハラ、又風・雨・雪・霜・悉く經歷リキョウ以て或ハ
寒氣ヒヤクシキ小遇スモレバひ或ハ日光の熱ヒート觸タチるをば、漸々ゼンゼン其細小
ある糠稜カガラも消磨ハシマハシマ去ルべし。此一事ハ外來の變化エイカイ
して自ら石より生ル變化エイカイあくび、石ハ一個の塊物
をルれを常住其處ル留メテ居リキル處モト、○今此の如記
事ル於て此石ノ同ジ所ノ諸物ハ之號死物と名く
るなり。

死物とハ外物ありて之號動ハシマハシマクに非れバ少シ一も變

せば本モト在リ所ノ留メテ居リ塊然カケラニたる一物の謂ナム。
但シテ一爰シテ小一双の綠小葉シロバ、輕鬆アラカルある土中アラカニ現アラカル、
其頭アシタカを日光の方ノ向カシマシけタリ、○汝他處モト行カシマシて一
週セウ七ナナ日ヒ後アフタ過ルた還ルて來ルとシテ、彼植物カクウツ大シきシありシ、
地シダより少シ一高シくあり、其内シナヘ小新葉シロバの生ルえかくシテ號見
3ベーシ、○一年を過ルぐとバ小樹シラカシとシテ嫩枝ハラハラを具ル、
滿樹シラカシは小葉シロバを生ルすべし、又汝我望シテよ從ハシマハシマひて五十年後
經ルる後來アフタ見ルときハ、其樹汝の體シラカシより巨シテ棕色シロハラ
の皺紋シワメタ、幹シラカシとシテ、且シテ海シマが頭上シマ蕃葉シロバの屋蓋シマをあ
し、而シテ先シテ小シテ植物今ハ大シきシ槲シラカシ樹シラカシとシテりぬ

一〇此の如くして日々大ぢくあり且漸々順序を以て變るゝ呼の諸物ハ之爲活物イモチと名けて其變化を死物と區別也。

看よ甲處アカシは一個の入あり、其も同しく生活をれど
其生活の式更々異なり、又乙處エトコトは穀莖の上に綠
色の蟲螽イナコ在り静定して我方を眺望せり。○汝輕々小
手残其處ハシナシ遣ア捕へんあと試験シキヤクミよ、汝彼タガが體コトコト近
づけば彼タガ其前マサニ飛ヒズン、汝今之ナウシ就て方カタ注意シテ
あくアク残得シテ、○是故ソシテ蟲螽イナコハ其身の周圍スルメイ起る所
の事を知り、且シテ已ヨリと動遷自適シテあくアク残得シテ、○此

事植物よりある所なり、但一蟲螽も亦植物の如く之
生長を、彼其始免ハ微細あり小卵ありシテ今ハ長二
寸許の形體となり、然ども其生長いつまでも同ド
クシテ、其生活せう間も常ニ其躰ニ新分枝増加を、然
ども之ニ準じて舊分減却すべしれバ、之を算計する
に一回生長ちうとさへ、其後更ニ大しくも又重く之
あらざるなり、

蟲螽も猶植物の如く一個の活物なり、然ども其生活の式植物よりも上等の屬也。是を以て我輩既に生活二種あることを知れり。即ち植物生活と動物生活と

是なり、諸生活體植物及動物の死物と異ある所ハ永く生存する事得キ、隨て長一隨て化シ、又常ニ新陳交代するに在リ、○其他生活體ハ其結構同ニシテ其部を以て成リテ其部各異の官能を具有シ、金石ニ於ニハ此の如きあらざることなし、○金石の質ハ名狀をべくしげる許多の小分子成以て成り、其分子互ニ相同シ、然ニバ金石の歟アラ只ニ蓄積物・即ニ凝聚物あるのみ、○然ども樹木ニ於テハ葉・枝・根・髓・材・皮等各自其官能を有しを見る、即ニ葉ハ大氣吸スヨウイ入し、蒸氣成發し、根ハ水液吸スヨウイ吸收し、小窠ナツキハ液汁を變換し、材ハ小

窠ニテ樹の造為をなす、アラ為ニ泌別モる物質を受くる如し、○之と同様動物ハ骨・筋・胃・肺・心・血脉及び他の部分を以て結構シテ各部各機を具有モ、○骨ハ幹材の如くシテ強固あることを手掌で、筋ハ四肢活動クシの用を有し、胃ハ食物を消化し、肺ハ血を清潔シ、心ハ其血を血脉ニテ身體諸部ニ運輸する等各部固有の組織成具ニ固有の式ありテ各個の作用を有し、是石類若くハ鐵などの分子と大ニ異ならぬ所あり、蓋シ石類鐵などの一分子ハ其相接する近傍の分子と全く相同し、○其他尚異ある所あり、即ニ活物

の諸部ハ互に相接續せざるを得ず、接續せば全
身復々生活するも、亦能ひば。○汝一片の火石若くも
一塊の鐵を破碎せよ、其殘餘も亦全く一片の鐵石を
足。○然ども活物は於てハ此の如くあることを能ひば。
汝樹木の枝葉拔去れ、其餘より復た小樹よひうば
(鐵ふ在てハ鐵の一小片の餘るが如く)其殘餘の物も
樹木をなす。○活體ふ於てハ諸部親密に相接し、各部其他部
胃・頭・或・ハ肺を除却せよ、其剩餘の物復た人を云べか
らば。○活體ふ於てハ諸部親密に相接し、各部其他部
號健動せしむる適し。又是ふ因て全部復好く運動

セキモリ要須なり。○是故小人之は一個の名目残
考出。希臘語を以て「オルカーン」と云是器械と云の
義なり。故ふ其諸部城オルカーン諸と名け、動植二
個の活物を器械世界と名けたり。之は反して死物皆
無機體又無機性體と名く。是各部全體の為よ各異の
作用祇具有も屬部より聚合せざる諸體の謂なり。
是故又動植二物共ふ有器體なり。然とも天地の間小
於て二物全く相異なり。たる作用を有して動物ハ植物
の造為する所の物拔消モ譬へば方よ第七月(我五
頃)比日輝を以て熟しぬる金黄色の穀田(彼邦トヨヒ
太抵麥田あり)

以て斯く形容の如く近時まである良好な穀物の寶藏をナセリ。○這個ハ是何の處より來る者ぞ。曰く、地より來て、又大氣中より來れ。蓋一穀物の全貯蓄ハ尚^ホ近時まで蒸氣及び瓦斯^{ガス}（形狀明^{カニ}なる物）煙とありて大氣及び土中より隱在セドナリ。○種子土中より破裂してより其熟セド穀穗とあるに至るまで藁及び穀の諸成分ハ徐々少^シ大氣中より吸收し、又水及び土より吸收モナリ。○但^シ今右の穀物より怎麽様の生^リ成生^スや。○人之^ハ採收して小舎より藏し、穀穗を摘去して其顆粒或粉末とナリ、之^ハ蒸餅^ヲ燒

お^リ食ひ、且^シ身體を養ふ為^シ、是化工の造為せ^リ。諸物の首長^人を植物の結成^{ナシ}所の物^{穀物}を滅^シ消滅し、且^シ耗散^モナリ。然ども茲^ム數月を経^ムときハ、其穀物の成分再び蒸氣及び瓦斯^{ガス}とナリて大氣中より去^リ、又糞壤^{コヤシ}とナリて土中^シ歸す。而して此後新^ム種子茂^テ土中^シ播下^モト^シ、其種子再び之^ヲ吸收して新^ムある。熟^シ秋^ノ耕耘^ノ迄^モ再び之^ヲ聚合して穀物とモベ。

今穀物の右の如^ク交渉をナシ^ム如く全地球上の諸草木も皆此比如^ク交渉^ヲ有^スナリ、動植二物皆互^モ

相交渉もとと猶人の穀物と相交渉もとが如し、然ど各自各其様式或異ふす、

動植二物右の作用を有さむ必ず一の妙理ありて存す、○人或ハ曰クノ物體を消滅すと、此ハ物體よりの形狀を與ふるより他なく、以て其實ハ他物を造成し出するなり、今石炭は燃火の中へ投げば之を費用するゆく即ち石炭の形殘消滅もとなり、是其故ハ即今まで石炭にてある一物復と石炭とあらば、城にてたり、然ど此の如く石炭の消滅もとに因ア熱及び他の驚異すべた事件を起せり、加之水蒸機關の

猛力を此石炭の消滅小因て起るなり、

造化の諸件は法度と建設するもと左は説く所の如くなり、即ち一二の力勢を起さりんとするもと、必に物體中は一二の變化を起して以て其力勢を發そべ、而して其變化ハ之淺く考ふれど、消滅と見ゆとも、其實ハ物體は單純無雜の質を分析するよモ他をうる角、○水蒸機關の火竈石炭は消化して蒸氣・灰及び煙とを、又之は因て熱氣と力勢とを其代へ發せらるべ如く人身も亦食物の消化が因て温熱と力勢と成得るなり、動物の諸物件は費耗するの理

即是と同し、夫動物も動作するが為ふ此世も生きた
ア、故ふ地球各部も動遷して諸般の事件の關係する
ハ其本務たり所たり、然ども其操作行動ハ之の應を
其力勢を具有するとき方小縛^ノ之をナヘシとを得
ル、而て諸動物其力勢が集合するも植物の曾て
採集セ物質が採用もした因故即動物ハ食物と
て植物分伐用る、又其より得て已^レ有ともし力勢の
爲小之を食物として消化し且耗散す、是を以て動物
ハ植物の曾て結構セ一所の物伐消滅し又植物ハ動
物の消滅セ一所の物伐再造モ。

食物の動物小於タリ恰も猶火を焚く竈小石炭を用
フ、^レ如レ既に發^レタリ火熱の度^レ應して間断ある
新^レ石炭^レ加へざり伐得ず、加へ^レバ火速^レ其
在^レ所の物を消化して消ゆるナシベし、然るナシベ
竈火石炭共^レ復^レ熱氣が保續するナシ伐得^レ、是
は竈も石炭も其用を失^レ、石炭も火も^レ其を燃^レ能^レ以てナリ、

第二篇

機性體諸元質の論

夫、植物ハ其機性分^レ陸續造為す者^トて以^テく全
く動物の食用小供^{シテ}べき一物體^トナシ、此一事ハ植
物^ト者天地の間^ニ於^ク有^リ、得^シるの大緊
要事件^トナリ、然^ドも植物の造為をな^シ機關^ト怎^モ様^{アリ}
リや、又之成^シ以^テ榮養^トナシの理^ト怎^モ様^{アリ}や、之成
好く領會^シナシ^ト、先植物の質料を尚^シ詳悉^シに識得せ
むこと^ト成^シ要モ、即^チ木材を以^テ云^リ、其内部^ニ賦^シテ有^リ
る許多の名工成^シ機^ト云^フ自然^ノ造^ル自^ラ之^ヲ造營^シナシ^ト機關^ト知
らんと要モ^トナリ、今天地の間^ニ大機運^シナシ^ト大隊
の全功^ヲ洞視^シナシ前^ニ方^トて^ハ宜^シ先^シ其大隊^ヲ編^シ束

多く人員^ヲ知^ルこと^ト成^シ要すべし、又其辭^ヲ變換^シて
云^フト^シ、有器體^ヲ造成^シナシ^ト所^ニの物質^ハ何物^{ナリ}や、
又其有生^ノ物質^ヲ造構^シナシ^ト元質^ハ何質^{ナリ}や、之成
知^ルこと^ト成^シ要するナリ、

總て有形^ノ諸物^ハ皆片々^ト破碎^シナシ^ト成^シ得べく
且^シ細末^トナシ^ト成^シ亦得^シ、石^ヲ哆羅^{シヤ}穀物^ヲ
紙片等皆器械^ヲ以^テ碾^シ或^ハ搗碎^シて細末^トナシ
あ^シ得^ベし、然^ドも器學家^之を細末^トナシ^トて復^シ
更^シ微細^トナシ^ト能^ハず^ト、他^ノ方子^ヲ以^テ
之^ヲ尚^シ微細^ヲ區分^シ、眼目復^シた見^ルあ^シ得^シ

「至る處」、是故小此方子行ふ所の人化學家即物質成分析する。○「得」は人の義なり。と名く。○物質分子の右の如くして得る者學語にて元質モノ・メソと名く。是復と分析することと得ざるに因る。物質の元素まで到底せりと云義小因るなり。此元質ハ一小ヒ臘語ガクを以て「アトオメン」即復と分析すべく、
能分子と名く。

然きバ機性體・無機性體成論せば諸物體最末の分子ハ皆「アトオメン」なり。是太と微細にて各別と見れ
能ハさうの物質なり。是復以て「アトオメン」ハ牢

固ふ聚結して一塊をなす時の始めて目視もろ去
と不得、牢固に聚結せざるをバ、曾て見えたく不得ベ
ラべ。○大氣を「アトオメン」を以て聚合せる物體あれ
とも其分子太た微細あるが故に得て目視すべく、
す。然ども其各個の分子間相互小空隙ベキマを設く。天地
の間ふ浮遊ぢり。○大氣の實は有形の物體たるもと
ハ確證をあすべし。但一重力ひよどる、人常々之を覺
へば、汝試小手紙上の方を擧ぐる時、一の抵抗も覺
へず、是甚だ微ある抵抗ふ久しく馴致サワリが故
あり、然とも汝今其面の大なる物譬へば一葉の紙又

大扇の如きを取りて之を高く致すべし、然るに汝明白は其抵抗感覺ゆべし、此ハ是其分子混同浮遊にて相共の大氣を造成する許多の小體の重力を有、若一個の物質其各分子間は許多に廣闊ある空隙を具せず、小體にて聚合し、以て之を目視する能ハゲラトキハ、其物質を名づく瓦斯と云、是故に大氣も瓦斯状の物體たりと、

然ども物體の諸元質にて皆同一を有すかく、各個其性相異ありと、モレ研學の輩漸々其各種を採收して検査する許多の方術を發明セリ、譬へば大氣ハ二個

各異の「アトオメン」成包含もるケ如し、○今燃ゆる蠟燭を玻瓈鐘ビヤクガラスの内に入らしむる、暫時間燃ゆ廻ると雖、未と全く燃へ盡ヨリて消ゆ、是以て其蠟燭鐘内小乃アリ大氣の殆ど五分一成費耗して、五分四成殘留せり何を以て其蠟燭ハ其殘留せる氣中ニ燃へゲラトシや、曰く、其五分四の氣ハ蠟燭の全く費耗するあく火得ざる成分なれバあり、

大氣ハ二種の瓦斯を以て成る、○其第一種ハ火焔比食餌とある者なれば自ら火の為ニ費耗せらる、瓦斯ナリテ、第二種ハ第一種瓦斯の扶佑ナリとバ火焔

滅するの瓦斯たり、化學家ハ其第一種瓦斯を「オキシ
ケニウム」元來生酸素と名く、是下章論すが如く
諸酸を生下する物質あるを以てなりと名け、第二種
瓦斯トロゲニウムと名く、是「トリウム」硝瓦生下する
物質たる瓦斯知るの義に基くたり、又此火燐瓦斯
モ瓦斯内に滅するもと唯々火燐のみを以て動物の
火燐も亦滅する故小之を名けく室素と云、是動物
此瓦斯内に入ると即ち室息する所以の故なり、又
始めて此の如き物件を發明せし人ハ酸素を生氣と

名す、室素瓦斯希臘語にて「アソーテ」と名けり、蓋「ア
ハ無の義」^ハ「ハ生の義あれバニ語合て無生氣と
云の意表示せらるあり、

今我輩尚他の兩件伐告知せざる伐得す、即チ一片の乾
木瓦斯火中投せば其木始より透朗清徹の燐
以て燃へて後ハ暗紅曇暗ある光を以て燃ゆる
ア、今其木瓦斯火中より出れて放冷するとき木炭と
云ふ暗黒の物體^{瓦斯}見るべし、此物質學者^ス於
テハ拉丁のカルボ即炭と云語より取て「カルボン」と云名瓦斯命たり、此黑色炭ハ單純ある元質^{瓦斯}にて

化學家の方術或ハ器械を以ても亦更ニ他の元質_{マテリヤル}分析モラシムと能ハざる者ナリ、此物ハ一個の元行_{マトリクス}にて草木ハ此元行より其體_{マテリアル}造成モラシムト然テ他「カルボン」即炭素_{カーボン}尚奇ある事件あり、此物たる輕鬆_{ソフ}みて見得ベシ_{シテ}瓦斯_{ガス}觸_{タッチ}スリムニ甚_シく分散_{セパレート}して復_{モサヤ}た見得_{シテ}瓦斯_{ガス}の小分子_{モル}子_{モル}又一片の木炭_{ウッドチャコ}再び火中_{火炉}投す_{スル}トニハ、怎_カ様_{ヤウ}の事件_{マジック}生_{スル}來_{スル}や、必_シ其炭再び紅色となりて熾_{カヤム}熱し、且_シ徐々_{シテ}分散_{セパレート}して些少の灰より、ハ他_{アシ}小餘_リ者_モを多_シ見ん、其時一片の木炭_{ウッドチャコ}ハ消滅_{シテ}それども、其

木炭_{ウッドチャコ}集成せし物質_{マテリアル}「カルボン」素_{カーボン}ハ消滅モラムトナリ、唯微細_{ミクロ}分散_{セパレート}して全く見得ヘシ_{シテ}、小分子_{モル}子_{モル}となり他方小去_{スル}の_{シテ}、是_ハ此事ハ我輩大氣中_{アエラ}に存在モラシ_ス知_ル酸素_{オキシゲン}を以_ス生_スモラシ所_{シテ}、此酸素_{オキシゲン}の分子間_{モル}小「カルボン」素_{カーボン}の分子_{モル}包含_{シテ}レバ一個見得ヘシ_{シテ}、_{シテ}の新瓦斯_{ガス}を造成_{シテ}て飛散_{シテ}、又化學家曾て此瓦斯_{ガス}水中_{アツミ}受容_{シテ}て検査モラシ方術_{マニアカル}を發明し、其頃既_{シテ}之_ガ酸性_{オキシゲン}の物體_{マテリアル}シテ_{シテ}經驗_{シテ}ゼリ〇酸素_{オキシゲン}ハ炭素_{カーボン}と抱合_{シテ}て一個の新瓦斯_{ガス}を生_スム_{シテ}ハ之_ガ名_シく炭酸瓦斯_{ガス}と云、

右の如くして成る。新瓦斯は尋常の大氣より區別あると極めて容易なり、然りも諸種の瓦斯皆目視する能べどす。○今清氣が清澄する一個の玻璃壇^{ガラス}に入と清淨炭酸瓦斯を他の玻璃壇^{ガラス}に入ると、兩個の壇共小原の如く透明なるべし、然るに其清氣が入ると壇中^{ガラス}に燃火せし蠟燭を入れると尚^ホ燃ゆべしと雖、炭酸瓦斯中^{ガラス}に消ゆるをうべし、又炭酸瓦斯へ同温^{ガラス}於て大氣よりハ甚^シど重く、且^シ酸素及び窒素よりも少く重し、而して慎て振盪せしむ

るあく、あく甲壇^{ガラス}より乙壇^{ガラス}に移すと、恰も水の如く注漏する能べし。

酸素ハ一片の黒毛木炭を全く分散^{セラメル}して透明ある瓦斯とする一異性あり、且^シ兩間諸元質中の最緊要なる一物^{シテ}、此瓦斯や隨在あり^{ドコモ}、處あく又萬物中^{シテ}小布満す、此瓦斯霧^{ミスト}露氣中^{ガラス}ハ純粹^{セラメル}现存^{セラメル}して窒素の中^{ガラス}浮遊^{セラメル}、約計^{セラメル}に窒素八十分^{セラメル}、酸素二十分(節^{セラメル}五中の一の如し)、然^シも大氣中^{ガラス}ハ窒素と親和せしむ、但^シ兩素粗漏^{セラメル}小相混淆^{セラメル}するのみ、酸素此の如く自立する能べし、有力^{シテ}休歇せしむ

萬物侵襲するの一物體たり、

酸素ハ(太約)窒素を除くの外、何物とも侵さざる事と
ナシ、鐵も和してハ^サ生せり、炭又柴薪も合して
ハ之燃燒せり、又大氣も曝露せる諸液も和すれば
バ之を^モ酸化せりむる故ハ、其貯^ム要する所
の物ハ、宜く嚴密^ム大氣も當てしめざるべく、壠子も
大氣の侵入を防ぐにて封定するも全く大氣を
防ぐにあらず、酸素を防ぐなり、酸素ハ總て其抵觸モ
諸物を侵襲し動物の組織及ひ體質を消化する者
ナレバ、元來六合中も大緊要機關をなす物質にて、

只其分子と他物の分子と抱合するのみで諸般の
變化が起すナリ、酸素の分子ハ他物比分子も抱合し
易^ク也と他物の分子相互も酸素の扶佑^ム抱合モ
ナニ優^シ也、方今六十二個の元質^一個^{室素}を除く
の外、多少酸素と親和力ある^シと^シ發明せり、

凡^ダ地球上に現存する諸物ハ皆酸素を含有する故
ニ、地球上の諸物を總計するも、殆ど過半酸素を以て
成れる事と^シ算定^シたり、

酸素の大聚積槽^{ヨセアッセンジ}ハ零圓氣あり、而して其槽より絶へ
ず諸物の方^ト行き^シて其分子他物の分子と抱合す、然

とも今霧園氣スモーク検査する所によると、其氣常々同量の酸素が包含し、酸素二十一と窒素七十九と以て成れ、酸素絶へて棄却せらるゝと雖、其量此の如く同じだ。何ぞや、是常々復と其缺之を補足せらるゝあるに因るなり、酸素ハ他物々抱合せんとする性甚大なりと雖、諸動物の之を費耗するほど更甚アリよ如かず、○凡草木の綠葉日輝を受くと悉く氣中も清淨なる酸素を流出す、蓋し綠葉の酸素が蒸發するハ之が自己の要需イニヤウとしてせざる所以てなり、但し綠葉ハ如何して酸素を得たるや、想ふよ清淨單純まで得一也。

非ざる事し。○炭酸ハ少く完絶へて氣中も浮遊する、綠葉が組織せし數千の孔穴常々之を吸收せり、然とも炭酸ハ其葉の透明ある小窠中少て再び日輝を分析せらるゝ炭酸と酸素と再び各自々獨立せりて其葉ハ炭酸が造構の為用ゐ酸素が返却モ。

(補説)本文小霧園氣ハ約するに酸素五分一(百分の二十一)窒素五分四(百分の七十九)含有せりと云フ、然とも實測も據るふ此説真正々非ざるべし、是大氣中よハ實小呼吸と焚燒とより生ずる炭酸も亦含有すねどやり、盖し植物ハ此炭酸を以て化

育せらるゝあり、但の大氣中の炭酸ハ絶へば他處より運輸へ來るゝ雖、其餘の氣は比較もろに其量甚た少く、且諸地諸高處の大氣を検査するふ通常百分の一足らずして其秤量の千分一炭酸が含有するを見たり。○然も大氣の秤量千分一の炭酸全植物の化育を保續すなり、又我輩純粹炭酸の唯三分一のみ純乎うち炭酸あるべく知れ是如何にて然るを以て得るや、凡て全世界諸植物の化育ハ實ニ炭素の扶佑ニ因て成らざらを得ず夫、理學派習學すれば、大氣層みへ地上ニ一個限定セ

3 壓量あるべく知り、又之ニ差て地球の表面幾何を知り、又其全地面ニナレ霧圈氣の壓量を算定す。然ど其千分一炭酸みて又其凡三分一即百分の二十七其氣中の炭素の量たゞ知る。○右の算計は從へば全霧圈氣中ニ現存する炭素約もろに荷蘭の十四百兆斤あり、又リイヒフ人の説ふ從へば右比量ハ全地球の草木及び石炭層の量よりも多と云。○此故小炭素の貯蓄ハ常ニ十分なり。

植物ハ酸素ニ蒸發す。○此蒸發ハ絶へば之あらに

アラシ、唯晝間のくたり、夜間ハ綠葉酸素を吸收して炭酸を呼出モ、是以く寢室ニ艸木哉多く置く事も害ありト。然ども動物の酸素を夜間ニ費耗すより晝間の發出よりも少く、是以て植物ハ動物の為ニ酸素の貯蓄をあんなり。

今我輩此好動ある物質酸素の其功業全ふす。一最要務と見るに實ニ酸素ハ天地間の工作場と於て草木の造構ニ必須ある諸重物炭素等有形の大搬運者也、草木ハ己ニ食餌を求む。小動物の如く行動能く能ひ、又齒あく又之を攫む凡も亦、然ども其

食餌ハ特ニ炭素を要す森林の中ニ在る巨大ある樹の數千斤の炭素と有り、其生育中ニ少く死得所ありて、蓋し休歇かく流動する酸素が因て得たり。酸素の微細ナリ分子ハ世界中何の處かと布蔓にて好んで炭素を求む。多く猶蜜蜂の蜜を造らるが為ニ好んで百花の露を吸ふ。如し、酸素ハ炭素小遇へバ之ニ附接して炭素の微細ナリ分子と和合し、以テ一個の新瓦斯を集成して風の為ニ吹き送ら其路上にて草木の綠葉ニ會すれば、之を布置せり。數千の小窓常ニ此瓦斯を受容せんとて開張する者

吸收せしる酸素其機運^{モード}アリ了まゝ時ハ小窠中
少て遊離レ直ニ再び外方小出で、新ニ他物ニ附着
モ、天地間の全機運中酸素の炭素を輸送モる機關^モ
ア最儀^モ著^ル者あらば、此機關ハ植物ニ最要なる食
餌^モ賦與^スルに要須たるより明白なり、
今酸素・窒素・炭素又二元質の親和^{シラフ}ニ炭酸^モ小就てハ
既ニ其説を知る所^モ得^ル、又一個他の元質水素
ト云者^モ、

今乾燥^{シテ}木材一片ニ火中^モ投すと、一個の
瓦斯炭素より分離^{シテ}逃出し、且燃ゆ、此の如くして

逃出^{シテ}瓦斯ハ全く純粹^{シテ}す^ム、炭素の一分を
含有されども之ヲ分析する^{シテ}難^ク、是即^チ水素
瓦斯^モ、^{シテ}逃出^{シテ}瓦斯^モ直ニ其近傍^モ在^リ酸素
と抱合^シ、以て水^モ造成^シ、此ハ乾燥^{シテ}瓦斯^モ翻
覆^{シテ}火上^モ保持^シ、瓦斯^モ容易^シ小見^ル、^{シテ}得
リ所^モ、^{シテ}其玻瓈^モの面^モ蒸氣^モ凝聚^シす^ムを見、又水
の現^{アラカニ}ハ乞來^リ、^{シテ}是^モ水素瓦斯^モ酸素の因て生
する所^モの物^モが故^ニ、此種の瓦斯を名^シ「ヒドロ
ゲニウム^{（造水質）}」^{シテ}云^フ、水素瓦斯ハ唯^シ木材中^モ
現存^シするのみ^{ナシ}、尚且^{シテ}炭^モ脂^モ油^モ及び其他の焚燒モ

重き諸物中太抵現存する故小其諸物が焚焼するに及ばず、水素と酸素と抱合を以て必し水を生來るなり、其量ハ比例す、小酸素一と水素二との如し、然ども其水素の二ハ酸素の量一よりも甚く輕し、如何とかれを水素瓦斯ハ世小知られうる諸物中小在にて最輕く且大氣よりも甚く輕也以てなり、若夫水素瓦斯の大ある絹布少て製り来る囊中も填滿するゝなり、其囊直も浮昇すべし、此事ハ一暴人曾々實際試みたり、即ち其人水素を巨大ある囊中も填滿して自ら其下小附着せし籠中も堅一直も其球と

共小揚托せらあり、

水素瓦斯ハ大氣よりも甚く輕く又酸素よりも輕れ
あり十六倍あり、而して其酸素ハ大氣よりも少しく
重りと/or/、故小一尺立方の水素瓦斯ハ一尺立方酸素
の十六分一磅秤量せり、我輩既々水と酸素の量一例
もとに一尺立方と水素の量二との抱合より成立せ
れ者をうこく成見たり、是故々此二素秤量の比例十
六と二とハ猶八と一との如し、然どバ水ハ秤量少て
酸素八と水素一と以て成立モ、故々水九斤ハ酸素
八斤と水素一斤とを包羅せり、

水素瓦斯の酸素・窒素・炭酸等の瓦斯と異なる所以も其燃燒する性小在ア、是他の瓦斯小在てハ決一ト之ゆうがる所ナリ。

水素瓦斯ハ其燃燒するに當て熱を起しこと甚シと雖、光發するあと甚シど少く炭素と親和する所始りく光と發するあと甚シ一譬へバ石炭の焚燒ス於タリガ如レ、是故市街の氣燈ガスリコハ此法を用ヒ、此法發行ラリ、之ニ適する竈中ニ石炭を焚きて其瓦斯を採り、之ヲ空筒ホテ諸處小引導スセ共瓦斯只其孔ある所ニ於てのミ上邊ニ騰ハルアリ、而して

其焰を得んと欲する者ハ筒上ニ小孔を造リ其處ニ火沈點シテ瓦斯發燃やれシくを得ス。

我輩既小酸素と共に氣中ニ布蔓せし窒素が說示せリ此物質も亦酸素水素の如く氣状シテて決して凝流の二體とあらず能ひて全く純粹シテ、然ベ少シ一モ臭氣ハリ此瓦斯ハ其質貴要シテて恰モ酸素と反對の性あり、酸素の休息多く流動シテケ如くなくば、怠慢遲滯シテて他の物質と親和シテキシテ好まシ、假令抱合シテキシテあるを忽ち再び遊離シテ、是故ニ室素の存在する處ニハ忽ち散渙崩起シテベト。

是室素再び去らんあるべく欲すに因て然なり、諸物を圍繞する所の氣中はハ太約室素を含むと、酸素よりも四倍多くと雖、此氣中が在る無機性體多くハ室素が含むと甚ざ少く、酸素ハ氣中は存在するあと甚ざ少く、雖殆ど至る處は存在して室素ハ何の處よりも殆ど何となく、兩間は小量ある物品唯三個硝砂・硝石・及洋釀を云々於て之が具有するを見るのみ、然とも動物體は室素必於稟舍ミツバシに以て之を動物の元行と名く可あり、是故以て總て動物の體が做す物ハ溶崩と傾く事と甚く速し、是遊離せん。

汝好む室素多く之は稟舍ミツバシ以てあり、此の如き事態と人間は腐敗と名く、人意小佳く、とて以てあり、然ども其實ハ物體の本質は復すより他ナニ、又謬誤アラカニて有智齊整の作用あり、動物の體ハ無機性體不易の反對して急速に變易し、居常轉倒し、且居常物質交換イカワリとす、是故小造化室素をば鬆疏して速く散開すべき動物體が造成もされ用ひ、其性凝聚する酸素を磐石の結構小用あり、動物の體が造成する小室素が求め来る、或ハ其食ふ所の他の動物より、或ハ草木よりす但し、食物小

供する草木より窒素なる者ナリトド、如何にて
又草木ハ之を得テや、炭素得ると殆ど同一之法を
以て得ラニシベシ、然ども炭素と草木は輸送モニテ
ハ酸素を以てセリ、此より特ニ上文小説示セラ水
素瓦斯成以てセリ、而して總く動物體の溶崩する處
小ハ必に窒素遊離成ナシ、然ども窒素ハ全く單純モ
逃出する事無く太抵動物體中ニ存在セラ揮發水
素若干分と抱合セリ、即チアトオメンの水素瓦斯一
アトオメンの窒素瓦斯と抱合シテ一個の新體アム
モニアム即チ砂精瓦斯成するトド、恰モ酸素と炭素と抱合

シテ炭酸瓦斯成する如ク。

アムモニアハ多量の水素より成立する物ナリタ故
ニ甚と揮發走竄シテ速ニ上騰シ飛散す、此故ニ大
氣中ニハ常ニアムモニアの若干量浮昇モ、是地球上
ニ在て隨時死モニ許多の動物屍ナリ發生モニ所ニ
係リ、雨雪之底下ニ送リテ地上ニ輸回シ、且之ニ地中
ニ引くとモハ草木根株の放開セラ小窠ニ會シ、此小
於て之ヲ吸收シ、且窒素モ亦之と共に運輸モニナ
リ、是故ニ葉ニ在て炭素求免シ如ク根小在ニハ窒
素瓦斯需ニシ。

「アムモニア」ハ其臭氣甚^ニ竈透^{シテ}以^テ之^ヲ知^ル事^ニ易^ク窒素の遊離する所^ニ隨處之あらざる所^ニ、是^ハ以^テ動物の屍骸及び糞尿の在^リ處^ニハ必ず「アムモニア」なり、如何とあれぞ此物窒素より成立^シ筋組織の消化する物^ヲ多^く生^キる者^ニ以^テて^ナ、是^ニ以^テ窒素の貯蓄を増盛^シしめん^ゲ為^シ、肥土^{ヨリ}草木の根^ニ致^ス、草木の根^ニ肥土^ヲ入^スと愈^々多く以^テ窒素を増大^シし^ムと愈^々多^くなるハ、其後實^ヲ結ぶ^シ時節^ニ於^テ其實愈^々肥大^シある^ケ、是故^ニ「アムモニア」ハ培養^ノ最要物^也。

且^ニ土中^ニ埋^ム適當^ニ也[。]此物地上^ニ在^リト^シ、第一不快の氣^ヲ以^テ人^々佳^ム有^リ、第二人の健全^ヲ損害^シ、而^シて其性恰^ニも言語^ヲ為^フ、我^々土中^ニ埋^ム、吾^々其處^ニ家居^シん^ダ云^フ者^ニ如^ク、其他尚^ニ常^ニ之^ヲ注目^シト^シ、兩間^ニ諸般の要事^ニ在^リ、アムモニア^ハ無機性體中窒素を含有す^ル小量物^ニ一^ア、而^シて草木^ハ好んで之^ヲ吸收^シ、其他尚^ニ窒素を含有す^ル無機性體あり之^ハアシテ^ニトリキム^硝と名く、是酸素と窒素との和合物^{ナリ}、

〔註〕酸素と窒素との和合物^ハ其數至^テ少^ニと雖^ム、其

内にて硝酸即アシチュム・ニトリキュムハ其最切要か
新物と云、

今右の二物怎樣の聚合發生して大氣を造成する
やハ既より之知る所を得たり、但し二物相親和す
ることある只微細の分子大虛中より在て輕鬆に相混
淆するのみ、然ども時々てハ二物稀有の原由より因
く密合する事無き之ゆり、千七百年代の末より當て化
學の一名家酸素の容積六分と窒素の容積三分を混
淆して之より電火^{エレクトリック}放通するアシチュム・ニトリキュム即ち
所謂硝酸を造成すべき事と見出しおり、乃ち知れ

硝酸より酸素の比例尋常の零圍氣より甚ざ大を
成す、今化學家の藥室内より行ふ所の半成
造化ハ其大工作場^{天地間}を指す於て施行せり、是自然の
良能なり、電氣^{エレクトリック}の流火、即ち電光大虛中を透射す
也バ茲より硝酸を造成す窒素^{ニトロゲン}之より因て酸素
より和合し後雨ふ因て地上より送輸せりと茲より草木比
根より吸收せり、譬へば猶酸素と和合する炭素の草
木の葉より吸收せりが如し、乃ち知る處一也雷電
の後直より地上小降り来る所の暴雨植物^ハ培養す
る強盛なるある所實より其雨水より酸素と窒素より

右の如く結合して含有せらるたり、名家「リイヒ」人より曾て七十七回の雨水を各別に採て貯へ種々の試験以て之を検査したり、然るべ其内十七ハ雷中若くハ雷後即時も採收せらる者あれど、皆硝酸あると見、其餘六十八常雨の時採收せらる者あれど、唯二の甚ざ少量の硝酸含有するが見たりと云。

今右の諸件を檢點するに依る、植物は在く二様の元質を吸收するべし、如何して成るや、我輩之を知るべく得たり、即炭素ハ植物の凝體を造るが爲め大氣中の炭酸より葉が因て吸收し、窒素ハ動物の

食餌となる。氮は分子造るが爲め硝酸及び「アムモニア」より根よ因て吸收するが見る、蓋し其「アムモニア」ハ雨水又へ糞壤等より土中へ來るなり。

窒素ハ大氣中も遊離して存在する者をども、植物も在てハ之を純粹小得るの方子^{ダテ}と見たり、
〔註〕植物ハ窒素只アムモニア及び「アシヂュニトリ・キユム」(氣中の硝酸)の如き親和せらる物體のみ小得ると云說ハ實は至論あらずとも、人或ハ問ひん、植物ハ何故は窒素只直ふ雰圍氣中より採らすやと、蓋一雰圍氣中小ハ窒素只酸素と混淆するのみ、

て純粹ふ存在するを以てなり學士等其理と研究
ノタビとも終ニ之を發明モリアト能フビトセリ、
然ニヨ方今佛蘭西^{ラヌス}ニ於て再び其說成唱ム者
ア、○近時一少年學士故ラ絶ヘテ室素を棄舍する
アシナリ土地ニ造リて之ニ植物を植ルヒトシ試
ムアリ然ニ室素吸合モリ諸物欲悉く排除シ
て純粹アリ酸素と室素よりハ侵入するシトナキ
鐘内ニ植物を生し且其長育の後之ヲ検査モリ、
其植物室素無含有モルニシイ見ナリ、
右の試験尚日々増進シテ更ニ新檢査をあす。

至シト見テアリ、○荷蘭ニ於クモ亦「ミルデルハル
チング^共人名の兩君及び其他の諸家之ガ試験を行
ひたり、

是故小動植二物成造構スニ特ニ顯著アリ元質其
數四あり、即^ナ左ニ開列モ、

第一 炭素是固形ナリて摸索するアリ得^ス物質
ナリ、機性體持小植物の元質)

第二 酸素是休歇するアリナリ揮發の瓦斯あり、自
ラ燃焼モベテモ雖好く其燃燒不保續セム
(無機性體・磐石等の元質)

第三 水素是甚を揮發して燃燒もんを瓦斯なり
第四 窒素是怠性ありて燃燒を産うべば瓦斯ある
と特よ動物體の元質做モ

右四個の元質彼此相互に親和もんともへ全く新物
を生ぞろナリ、即チ

炭素
酸素
水素
熾熱にて親和して炭酸を生ず

炭素
酸素
水素
熾熱にて親和して水を生ず

酸素
窒素
水素
窒素
水素
窒素
親和してアムモニア・硝砂を生ず

(註)右比例及び他の例證小據をバニ物或ハ單々混
合し、或ハ化學の式より從て親和もんともべ知る。○
酸素と窒素との某比例にて混合するとも、清淨
爽快にて呼吸有利ある氣をなすと雖、親和して
硝酸となれど、蝕性猛烈の強水とあるなり。

又水中より稟舍する元質・水素瓦斯ハ一已より燃焼し、酸素ハ一已より燃焼せ保續するものなるべし、火燭を純粹なる酸素中より入るゝときハ、其燃焼するもと零圍氣中よりも甚ざ熾盛なり、然ども之を酸素と水素との二物より親和する水中より入れば忽ち消滅モベし。

化學上於てハ右許多の親和物若くハ混合物又再び各自小分析するの方子代知り、而して其方術甚ざ妙ナリトス。

淨水ハ酸素瓦斯と、水素瓦斯となり、而して如何

て酸素ハ好んで容易に親和せんとするやう、我輩既ニ之を知り、然ども其尚好んで親和せんとする物少々會すれど直ニ之を親和して先に親和せし物體が遊離モ、故に此式を以て水素瓦斯ハ容易に採收するアリ得べきなり。

今一個の鐵筒スチールの如きより鐵屑若くハ鐵床或填充して之を火上に熾マツカセし、且つは水蒸氣を通過せしむるとき、容易に水素瓦斯が採收するもと心得ヘ、水中の酸素ハ其熾熱に因て直ニ鐵と親和すとも、水素瓦斯ハ親和するこゝ能ク。

是バ他處よ遊離す酸素ハ鐵ニ親和しなれば、手鎗筒の鐵屑を填充せし者、今ハ酸素を含ムシ秤量^{カケメ}増加セリ。

又純粹ある窒素が採收する事ハ、大氣中の酸素が強く燃へ一て得度一とし、即^チ大氣中の鱗片を燃焼する時の如し、

別例

アムモニアハ窒素と水素との親和物なり、窒素の親和性^モ好まざるも、我輩之を知る是を以テ「アムモニア」の某量を密閉せし土器・若シハ鐵器

中ニ入り久しく且甚しく焼く事無く、容易ニ之が分離する事成得ベし、此の如くすらとキハ「アムモニア」尾斯漸々^シ稀薄となり、且其容積^{カナ}を増^シ終^ス其尾斯の臭氣及び性稟悉く脱する事至るべく而して窒素・水素各自の比例を驗^シム一と三との如くあり、

今茲^シ尚^シ一個簡約の辨解^シ加^シんシ、

酸素(二十一分)と窒素(七十九分)と^シ親和する事有^シ然とも混淆^シむ事有^シ、零闊氣とある事ハ我輩既^シ之歴知れり、此の如くして成^シむ零闊氣ハ全

く清淨にて且乾燥す、然りて此の如を者殆どあり。

地球上より酸素と炭素と絶へて親和するを以て炭酸を生ず、是諸般の焚薪及び下條論す。如く呼吸等より之を生むたり。○其炭酸ハ瓦斯の状態にて氣中アリ在アリて他の瓦斯間アリ混淆す。

其他常アリ掀簸ボルして波濤ハタハタ海面・河湖等の水面より常アリ水分蒸氣アリて風アリの呑吐アリ進アリ入アリて、天氣寒冷アリ凝聚アリて雨滴アリ地上アリ降アリり來至アリ、是其後再び蒸氣アリ上騰せんアリてか

其他地球上アリ常アリ消滅する動物體の物質あり、此物より窒素分離アリて水素と親和アリ輕鬆あり、アムモニアアムモニアとなり、而して其アムモニアアムモニアハ氣中アリ騰アリて再び兩雪アリ因て地球上アリ輸轉アリ是を以て大氣ハ其固有の成分の外常アリ左の三件アリ含蓄す。

炭酸

水蒸氣

「アムモニア」

是皆諸植物の大なる食餌アリ者あり、

既小揭示セシ炭素・水素・窒素等の成分の外尚彼此の植物を造構するに要需トス元質二三あり、然アト雖、唯、甚ご塵々たりム、是、甚ご微細ニ分散セリ諸無機性體地中より植物は根纖維ニ吸收セリ者云々ナリ、此の如き物質植物中其數十有二アリトとを發明セリ、即チ硫黃・燐・鐵・加尓基・粘土・咲叶沙・及び曹達等之ニ屬モ、按阿賴及ヒ貌羅繆謨と云ふナリ登レ此餘の五品ハ珪土・苦土・各羅林然ドモ右の物質ハ諸植物ニ必需之アリト非ナ、只一二種の草木ニ之有、而して植物生育の畧論小ハ之ヲ掲げ、すて可ナシベ茲ニ洩ル、

